

年 報

2025 年度のトピックス (Annual Report 2025)



大阪大学国際機構国際教育交流センター

Center for International Education and Exchange
Institute for International Initiatives
The University of Osaka

巻 頭 言

大阪大学国際機構国際教育交流センター長

義永美央子

本年度（令和 7（2025）年度）は、大阪大学全体の「国際」を担う組織として、グローバルイニシアチブ機構と国際教育交流センターが統合する形で国際機構が発足し、新たな船出を迎えました。国際機構では、同一組織内でデータ分析に基づく国際戦略の立案から、戦略に基づくグローバル人材の獲得・支援・育成のための各種取組の実践・評価・改善および全学展開を推進できる体制を構築し、「文化の違いを超えて新たな社会価値の創出を先導できる人材の育成」をより強力に推進します。

国際教育交流センターは国際機構を構成する組織の一つとして、引き続き全学の国際教育交流の基盤的機能を担います。具体的には、入学前から在学中、卒業・修了後に至るまでの一貫した「留学生ライフサイクル支援」を確立します。また、全学の学生交流（受入・派遣）、多文化共修を含む国際教育プログラムの企画・改善・質保証等を統括する機能を構築します。

本年報では、国際教育交流センターの 2025（令和 7）年度の注目すべき活動を示すトピックスとして、「1. 多文化共修科目の企画開発」「2. OUSSEP アンバサダー企画」「3. OU バディ活動とオープンバッジ認定の導入」「4. 留学生教育学会、日本文化研究会とのワークショップ共催」「5. 第 39 回言語文化学会年次大会の開催」「6. 専門日本語教育学会第 28 回研究討論会の共催」「7. CIEE 研究協議会シリーズ―多文化交流の最前線」「8. 理学研究科特別日本語プログラムの実施」「9. 2025 年度夏休み・春休み日本語特別演習の実施」「10. 国立大学フェスタ OU マルチリンガルプラザ体験」「11. 高度外国人材に向けたキャリア支援イベントの実施」、以上 11 点について報告しております。受入・派遣双方を見据えた短期留学の推進、日本語教育プログラムの実施、留学生支援とアドバイジングといった国際教育交流センターの基本的業務に加え、他部局や他組織、学生の皆さんとの連携・協働に基づく企画や発信を活発に行った 1 年であったといえます。

大阪大学の外国人留学生数は 2025 年 5 月 1 日現在で 2,719 名となりました。国際教育交流センターはこれからも「大阪大学が核となり地域と世界の人々とが繋がり、互いを尊重し合う安心・安全な多文化共生社会の創造」「多様な知を持って社会課題の解決に臨むグローバル人材の育成」という国際機構のミッションの達成を目指し、積極的に貢献します。

大阪大学国際機構国際教育交流センター

2025 年度 年報

目 次

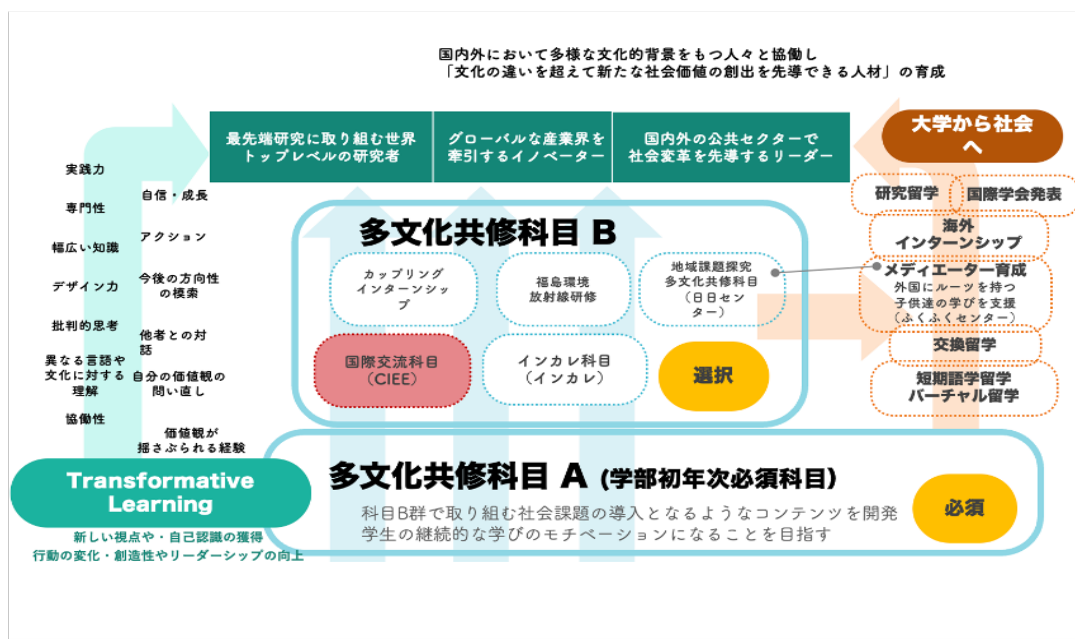
巻 頭 言	1
I. 多文化共修科目の企画開発	3
II. OUSSEP アンバサダー企画	5
III. OU バディ活動とオープンバッジ認定の導入	6
IV. 留学生教育学会、日本文化研究会とのワークショップ共催	7
V. 第 39 回言語文化学会年次大会の共催	9
VI. 専門日本語教育学会第 28 回研究討論会の共催	11
VII. CIEE 研究協議会シリーズ — 多文化交流の最前線	17
1. 国立大学法人留学生指導研究協議会	17
2. 第 18 回大阪大学専門日本語教育研究協議会	19
VIII. 理学研究科特別日本語プログラムの実施	23
IX. 2025 年度夏休み・春休み日本語特別演習の実施	26
X. 国立大学フェスタ OU マルチリンガルプラザ体験	28
XI. 高度外国人材に向けたキャリア支援イベントの実施	29

I. 多文化共修科目の企画開発

令和8年3月30日6年度11月に文部科学省の「大学の国際化によるソーシャルインパクト創出支援事業（タイプⅠ：地域等連携型）」に採択され、本学では令和10年度に学部初年次の必須科目として多文化共修科目を導入することを目指し、現在科目の開発を進めている。

まず科目の開発に向け、全学で共通認識を持ちながら科目の企画・開発を進めるため、科目開発を担う全学的なチームを立ち上げた。本チームは国際機構を中心に、日本語日本文化教育センター、インターナショナルカレッジ、全学教育推進機構、マルチリンガル教育センター、スチューデントライフサイクルサポートセンター等、学内の多様な部局が参画する体制とし、部局横断的な協働体制を整備した。また、学内には多文化共修のグッドプラクティスと位置づけられる既存の科目やプログラムが存在することから、これらを担当する部局（接合科学研究所、核物理研究センター等）とも連携し、知見や実践事例の共有を図りながら科目開発を進めている。

多文化共修科目Aを学部初年次の必須科目、多文化共修科目Bを選択科目として位置付け、全学のカリキュラムの中に体系的に組み込んだ。これにより、科目Aを受講した学生が、継続的に国際的な学びを深めることができる科目の枠組みを構築した。科目Aおよび科目Bには共通の目的、内容、到達目標を設定し、大学全体で共通認識を持ちながら科目の企画・開発を進めている。全学的な科目のすり合わせを行うため、本年度は全体打ち合わせを学期に1度実施した。また、個々の部局とより緊密な連携を図るため、定期的に個別の打ち合わせを設け、継続的な情報共有を行った。



令和 8 年度から学部初年次学生の必須科目として開講予定の「多文化共修科目 A」の円滑な導入に向け、パイロット実施を目的とした準備および検証を行った。具体的には、以下の取り組みを実施した。

- ① 多文化共修科目 A の履修を予定している学生層への理解を深めるため、科目に対する意識調査およびグループワークのトライアルを実施した。令和 7 年度春夏学期末に、科目 A の受講を予定している学部初年次学生を対象に、多文化共修科目に対する意識調査を実施し、1,432 名から回答を得た。現在、アンケート調査データの分析を進めており、その結果を踏まえ、令和 8 年度から開始するパイロット科目の授業設計を行っている。また、多文化共修科目 A は、英語を用いて社会課題にグループで取り組む科目であることから、学部生が英語でどの程度社会課題に取り組むことが可能かを検証するため、グループワークのトライアルを実施した。本トライアルには 16 名の学生が参加し、本学学生の英語力、課題解決力、協働力等について一定の把握を行うことができた。
- ② 科目のパイロット実施に向け、科目の目的、学習目標、授業構成、課題および評価方法等について検討を行った。明確な科目の目的、学習目標、授業構成、課題および評価方法等を検討することで、学生が科目に対して理解を深め、授業への参加意欲を高め、学修成果（到達目標）に向けた学びを計画的に進められるようにした。
- ③ 科目 A において学生が取り組む社会課題については、企業等と連携し、多様な社会課題を扱うことができるよう動画教材の作成を進めた。科目で使用する動画教材については、現時点で計 15 団体（NPO4 件、市民団体 1 件、地方自治体 1 件、民間企業 9 件）から連携の承諾を得ている。すでに 6 本の動画教材が完成しており、現在、さらに 8 本の動画教材の作成を進めている。
- ④ 本学学生がパイロット科目を履修しやすいモデルを検討するとともに、科目内容への理解促進を目的とした学内向け周知資料および動画の作成を行い、あわせて広報活動を開始した。多文化共修科目 A は、令和 8 年度 4 月からパイロット実施を予定しており、学生が円滑に履修できる履修モデルの検討を進めるとともに、科目の目的や内容について理解を促すため、学内への周知活動を開始している。

今後は、多文化共修科目のパイロットを実施しながら、科目を担当する教員向けの育成プログラムを検討や TA・SA システムの構築の検討も進めていく予定である。令和 10 年度までに本科目を学部初年次の必須科目として導入するために、多くの課題や検討すべきことがあるが、多様な部局と連携を取りながら今後も引き続き科目の企画・開発に取り組んでいきたい。

II. OUSSEP アンバサダー企画

国際機構国際教育交流センターでは、OUSSEP（Osaka University Short-Term Exchange Program）に参加する留学生が主体となり、学生の視点からプログラムでの学びや経験を発信するとともに、留学生と日本人学生の交流を促進することを目的として、新たな学生代表制度「OUSSEP アンバサダー」を立ち上げた。本企画は、学生主体の国際交流活動を促進する新たな試みとして実施している。2026 年度は試行的に実施し、その成果や課題を踏まえながら改善を行い、2027 年度以降の本格的な運用につなげていく予定である。

1. 企画の概要

OUSSEP アンバサダーは、OUSSEP 参加学生が自身の留学生活や学びの経験を紹介し、学生同士の交流や国際交流活動の活性化に寄与することを目指す学生主体の活動である。本制度では現時点では人数を限定せず、参加を希望する学生が柔軟に活動に関わることができる形としている。

2026 年 2 月にアンバサダーの募集を行い、4 名の留学生が参加することとなった。2026 年 3 月には初回ミーティングを実施し、企画の趣旨や活動内容について説明するとともに、今後の活動に向けた役割分担や連携方法について確認を行った。

2. 今後の活動予定

アンバサダーは、2026 年 4 月に実施される OUSSEP オリエンテーションを皮切りに、本格的に活動を開始する予定である。オリエンテーションでは、学生の視点から大阪大学での留学生活や OUSSEP での学びについて紹介する機会を設ける予定である。その後も、OUSSEP 関連イベントや交流企画への協力、学生生活や学びに関する動画の作成などを通じて、大阪大学での国際交流の魅力を学生の視点から発信していくことを計画している。

アンバサダーとして一定の活動に参加した学生に対しては、活動実績を可視化する取り組みとしてデジタル証明であるオープンバッジの付与を予定している。次回のアンバサダー募集は、2026 年 4 月から 5 月頃に実施する予定である。



OUSSEP アンバサダー募集 PPT。OUSSEP 専用メーリングリストおよび関連イベントにおいて企画の紹介を行い、参加学生の募集を実施する予定である。

Ⅲ. OU バディを含むオープンバッジ認定

OU バディは、国際教育交流センター学生交流推進部門が実施する短期留学プログラムにおいて、留学生との交流を支援する学生ボランティア活動である。キャンパスツアーや大阪市内散策、授業サポート、オンライン交流などを通して、留学生との相互理解を深めることを目的としている。

2025 年度も、超短期留学プログラムである夏の J-ShIP、冬の J-ShIP および UMOS の各プログラムにおいて OU バディ活動を実施した。学生は交流イベントの企画補助やグループ活動のサポートを行い、留学生との交流を通じて語学力や異文化理解を深めた。アンケート結果からも、参加学生の約 9 割が活動に満足しており、留学生との交流を通じて新たな学びや国際的視野の広がりを実感していることが確認された。



写真 1-2 2025 年度冬 J-ShIP 短期留学生と OU バディの交流活動の様子（豊中キャンパス・トレジャーハンティング）。当日は大阪大学を象徴するスポットなどを探す活動を行った。

2025 年度は新たな取り組みとして、OU バディ活動の成果を可視化するためのオープンバッジ制度を導入した。本制度は、SLiCS センター教学 DX 部の審議を経て導入が進められているもので、学生の課外活動をデジタル形式で認定するものである。

発行するバッジは以下の 2 種類である。

1. OU バディ参加バッジ

OU バディとしてプログラム活動に参加した学生に対して、学年末に発行する参加証バッジである。2025 年度は、夏・冬の J-SHIP および UMOS の参加者を合わせ、希望者のみ、バッジを 38 名へ発行した。



2. OU バディ表彰バッジ（優秀リーダー）

複数回リーダーを務めるなど、特に顕著な貢献を示した学生を対象に授与する表彰バッジである。選考は国際教育交流センター学生交流推進部門の選考委員会（石倉・福良・チェンドム）により行い、2025 年度は 3 名を表彰対象者として選定した。

IV. 留学生教育学会 日本文化研究会とのワークショップ共催

2025年11月7日、大阪大学コンベンションセンターにおいて、留学生教育学会 日本文化研究会と大阪大学国際機構国際教育交流センターの共催によるワークショップ「Beyond Stereotypes: Understanding and



写真1 ゲスト講演の様子

Expressing Japanese Culture (固定観念を越えて、日本文化を理解し、発信する)」を開催した。

本ワークショップは、学生と大学教員がともに参加し、日本文化をどのように理解し、どのように国際社会へ発信するかを考えることを目的として実施された。当日は留学生、日本人学生、大学教員など最大で約40名が参加し、日英併用でプログラムが行われた。

前半では英語によるワークショップを実施し、「海外に伝えたい私の日本」をテーマに、参加者が自らの視点から日本文化を捉え直し、それを言語化する活動を行った。後半では教員向けのセッションとして、日本文化教育において生じやすい固定観念の問題を共有し、動画制作などの実践的手法を通じて、日本文化をどのように授業で扱うことができるかについて議論を行った。

1. ゲスト講演と教育的意義

ワークショップの後、公益財団法人大阪観光局 統括官・経営企画部長・MICE誘致戦略部長の田中嘉一氏をゲスト講師として迎え、「大阪・関西万博における日本文化発信」をテーマとした講演を実施した。

世界に伝えたい日本の魅力 ～This is JAPAN～

① 静けさと敬意を大切に暮らす

日本では、静寂は他者への思いやりであり、美しい所作のひとつです。電車や神社、自然の中で声を控える行動には、他者と共有する空間を尊ぶ心が込められています。余白にこそ美が宿るといふ「わび・さび」の感性の表れでもあります。

② お辞儀と挨拶に宿る心

頭を下げるだけの仕草にも、相手を敬い、自分を省みる心が込められます。言葉少なに通じ合うのもまた、日本の「道」の一端。日々を丁寧に生きる姿勢が、静かに伝わっていきます。

③ 思いやり

他者の心の痛みに気づき、そっと寄り添う——それは、日本社会に根づく「思いやり」の核です。列に並び、譲り合う日常の行動に、「共に在る」ことの美徳が表れます。

④ 調和の美徳

「もったいない」という言葉に代表されるように、物や自然に対しても敬意と感謝を抱く文化があります。無駄を避け、調和の中に生きる。そこにこそ、自然と調和する「道」があります。

⑤ 食事への感謝

「いただきます」には、命をくれたもの、育てた人、調理した人への感謝が込められています。四季の恵みに手を合わせ、五感で料理を味わう——日々の食卓に、「自然と人とのつながり」が静かに宿ります。

⑥ 自然への畏敬と礼節

山も森も、風も水も、ただの景色ではなく“生きた存在”。自然と共に在るという感覚は、古来より「神と暮らす」文化として息づいています。足音ひとつにも気を配るその振る舞いに、自然との共生への感謝が表れています。

⑦ 包容力と多様性

日本は、他者と異なることを否定せず、静かに受け入れてきた歴史があります。古い価値観を活かしながら、新たな考えを柔らかく包む——「温故知新」の姿勢が、多様な世界との調和を可能にしています。

⑧ 「おもてなし」に込められた心

日本のおもてなしは、自立たず、控えめで、しかし深く温かい。相手を思いやる所作の積み重ねは、「心を尽くす道」に通じます。言葉だけでなく、優しさや気遣いの空気を感じてみてください。

⑨ 日常に息づく美意識

折り紙の一折、茶を点てる所作、書の一筆など一見ささやかな行いにこそ、深い美が宿ると信じる文化。日常の瞬間に目を留め、美しさを感じ取る、日本人の誇る美意識はそんな場所にこそ宿ります。

⑩ 世界平和・協調の希求

「和を以て貴しとなす」は古から日本人に根付いてきた、協調を重んじる心です。ただの観光者ではなく、共に世界をよりよくする「心の大使」として、この国の静けさ、美しさ、やさしさを、世界へ持ち帰ってください。

講演では、「This is JAPAN」で示されている「静けさ」「思いやり」「おもてなし」など、日本文化を特徴づ

講演では、「This is JAPAN」で示されている「静けさ」「思いやり」「おもてなし」など、日本文化を特徴づける価値をどのように海外に伝えていくかについて紹介が行われた。2025 年大阪・関西万博を視野に入れた文化発信の取り組みや、その背景にある考え方について具体的な事例を交えて説明がなされ、参加者にとって日本文化を国際的に発信する際の視点を考える貴重な機会となった。講演後には参加者との意見交換も行われ、日本文化を海外へ発信する際に生じる誤解や固定観念について、教育・観光・国際交流の視点から多角的な議論が展開された。

2. 今後の展開

本取り組みは、留学生教育学会、日本文化研究会の活動と協力して継続的に実施する予定であり、今後も大学教育の現場において、日本文化を多面的に理解し国際社会へ発信する教育実践の共有を進めていく予定である。

The poster is for a workshop titled "BEYOND STEREOTYPES: UNDERSTANDING AND EXPRESSING JAPANESE CULTURE". It features a QR code for pre-registration and a map of Japan in the background. The text is in both Japanese and English.

留学生教育学会
Japan Association for International Student Education

INSTITUTE FOR INTERNATIONAL INITIATIVES
THE UNIVERSITY OF OSAKA

事前登録必須 | Pre-registration Required

学生と教員が一緒に学び、考えるワークショップ

固定観念を越えて、日本文化を理解し、発信する

BEYOND STEREOTYPES: UNDERSTANDING AND EXPRESSING JAPANESE CULTURE

Date: Friday, November 7, 2025
9:30 AM – 12:30 PM Doors open 9:15 AM
Venue: The University of Osaka, Suita Campus, Convention Center, 1F, Room 1

参加費 | Participation Fee
外部学生（前半のみ参加）: 500円
External students (morning session only): 500 yen
その他の参加者: 1,000円
Other participants: 1,000 yen
大阪大学国際機構の学生・教職員、留学生教育学会会員は無料
Free for OU CIEE students & faculty, and JAISE members

進行・講師 | Moderator & Workshop Facilitator
チェンドム・アンドレア
(大阪大学 国際教育交流センター 特任助教)
Andrea CSENDOM
(Sp. App. Assistant Professor,
Center for International Education and Exchange, Osaka University)

写真1 ワークショップポスター

V. 第 39 回言語文化学会年次大会の共催

2026 年 3 月 28 日（土）・29 日（日）、大阪大学吹田キャンパス IC ホールおよび国際教育交流センター教室において、言語文化学会第 39 回年次大会（大会総合テーマ「異文化理解と共生 ― 日本の転換期における対話と創造」）が開催された。本大会は言語文化学会主催、大阪大学国際機構共催により実施された。

本大会では、言語・文化・教育・社会など多様な分野から研究発表が行われるとともに、「多様性と異文化理解」をテーマとするパネル・シンポジウムが開催され、異文化理解や共生社会のあり方について多角的な議論が行われた。また、文化プログラムとして日本舞踊の披露も行われ、学術的議論と文化的交流を合わせた大会となった。参加者数は、28 日が 33 名、29 日が 39 名、オンライン参加者が 11 名であった。



写真 1 大会の様子

1. 学生・若手研究者セッションの実施

第 2 日目には「これからの地球社会をどう生きるか？」を総合テーマとする学生・若手研究者セッションが実施された。宗教、文化、社会、科学技術など幅広い分野からの発表が行われ、参加者との活発な質疑応答が展開された。大阪大学からは学生 4 名が研究発表を行い、異文化経験や社会的課題に関する研究成果が紹介された。学生にとっては、学術的な議論の場に参加し研究成果を発信する貴重な機会となった。

2. 国際機構との連携と大会運営

本大会には OU バディを中心とした学生メンバーも参加しており、国際機構が推進する国際交流活動と学術活動が連携する形で大会が実施された。学生の参加を通じて、国際機構の教育・交流活動の広がりを示す機会ともなった。

チェンドム特任助教（大阪大学国際機構）は大会委員長として大会全体の企画・運営を担当するとともに、パネル・シンポジウム「多様性と異文化理解」にパネリストとして参加し、留学生教育の授業実践を例に異文化理解の課題と教育的示唆について意見を述べた。



写真2 休憩時間に行われた日本舞踊の披露（日本舞踊飛鳥流・飛鳥天紅）



写真3 大会のポスター

VI. 専門日本語教育学会第 28 回研究討論会の共催

2026 年 3 月 7 日、大阪大学豊中キャンパスの大阪大学会館において、国際機構国際教育交流センターが共催となった専門日本語教育学会第 28 回研究討論会が行われた。今回は「専門日本語教育とは何か」と題したシンポジウムが行われ、続いて、口頭発表とポスター発表が展開された。学内外からの参加者は 168 名にのぼり、盛況のうちに閉幕した。プログラムとポスターは次の通りである。

専門日本語教育学会 第28回 研究討論会

日時：2026年3月6日（金）

・受付 9:30～

・研究討論会 10:00～17:40
(シンポジウム・口頭発表・ポスター発表)

・総会 13:45～14:10

会場：大阪大学豊中キャンパス
大学会館

- シンポジウム 「専門日本語教育とは何か」
- 口頭発表 午前4件、午後4件
- ポスター発表 午後18件

STJE <http://stje.kir.jp/lang-ja/discussion/>



第 28 回 専門日本語教育学会総会および研究討論会

日時： 2026 年 3 月 6 日（金）

受付 9:30～

研究討論会 10:00～17:40（シンポジウム・口頭発表・ポスター発表）

総会 13:45～14:10

会場： 大阪大学豊中キャンパス 大学会館

シンポジウム、総会、論文賞発表、口頭発表 ： 2 / 3 F 講堂・2 F セミナー室 1

ポスター発表 ： 2 F アセンブリー・ホール

ランチ交流会 ： 2 F アセンブリー・ホール

共催： 大阪大学国際機構国際教育交流センター（CIEE）

【プログラム】

□ 開会の挨拶 10:00～10:10 講堂

開催校の挨拶： 有川友子 国際機構長（大阪大学）

開会の挨拶 ： 石黒圭 会長（国立国語研究所）

会場諸注意 ： 福良直子 実行委員会副委員長（大阪大学）

■ シンポジウム 10:15～11:15 講堂

「専門日本語教育とは何か」

（司会：石黒圭_国立国語研究所）

専門日本語教育の定義

石黒圭（国立国語研究所）

専門日本語教育学会の理念

村岡貴子（大阪大学）

専門日本語教育研究の歴史－これまでの歩み－

野田岳人（群馬大学）

専門日本語教育学会の未来－これからの展開－

生天目知美（東京海洋大学）

■ 口頭発表① 11:25～11:55 講堂

（①②司会：ポボヴァ・エカテリーナ_関西大学）

大学院留学生の個別研究指導場面の談話実態の考察－1 学期間にわたって 3 回のデータから－

田鉦（一橋大学大学院生）

■ 口頭発表② 12:00～12:30 講堂

日本語教材と比較したビジネス日本語教材の特徴について

－「クレーム」「苦情」に着目して－

池内優香（大阪大学大学院生）

■ 口頭発表③ 11:25～11:55 セミナー室1 (③④ 司会：前川孝子_日本大学)
中国の大学入学試験に備える高校の日本語教員が持つ作文教育観－広東省の教員の事例をもとに－
ニン・レン（大阪大学大学院生）・村岡貴子（大阪大学）

■ 口頭発表④ 12:00～12:30 セミナー室1
専門課程につながる読書教育プログラムの開発－人文系学部留学生を対象として－
脇田里子（同志社大学）

ーランチ交流会【於：アセンブリー・ホール】ー 12:40～13:30

○ 論文賞発表 13:35～13:45 講堂
進行・講評：俵山雄司 編集委員会委員長（名古屋大学）

○ 総会 13:45～14:10 講堂
進行：生天目知美 代表幹事（東京海洋大学）

■ ポスター発表(1) 14:15～15:10 アセンブリー・ホール (進行：菊池和徳_大阪大学)

- 1 反転授業用のビジネス日本語教材の開発
中川健司（横浜国立大学）・鈴木綾乃（横浜市立大学）・河瀬恵子（東京経済大学）
- 2 文系中国人大学院生の日本語アカデミック・ライティングにおける生成 AI 使用不使用の
判断プロセス
大島弥生（立命館大学）・三井久美子（立命館大学）
- 3 縦断調査への参加継続を支える学習者の調査に対する認識－S-CoLeJa 調査を事例に－
須賀和香子（総合研究大学院大学大学院生）・呉 楚琦（一橋大学大学院生）
橋本宜子（国立国語研究所）・布施悠子（国立国語研究所）・石黒圭（国立国語研究所）
- 4 生理学の科目学習に必要な動詞の抽出と類型化に向けた一考察
－国家試験と教科書総論部分の出現語彙の対照から－
河住有希子（日本工業大学）・藤田恵（日本国際教育支援協会）・川村よし子（元東京国際大学）
- 5 外国人日本研究者は古典日本語教材に何を求めているか
－母語話者向け教材で学んだ学習者へのインタビューの分析－
山口真紀（日本大学）

- 6 ライティング支援に携わるチューターによる論文作成の経験則
 – 様々な専門領域で研究する大学院生を対象としたインタビュー調査から –
 トンプソン美恵子（東京大学）
- 7 大学院授業におけるテキストディスカッションの有効性についての検討ーテキストディスカッション
 アプリ「Logostellation」の大学院ゼミナールにおける実践例を通じてー
 浦野歩（国立国語研究所）
- 8 聞き手を意識した内容伝達活動において日本語母語話者は何に気づいたか
 – 「国語応用演習（表現）」と「専門ゼミⅠ」の実践より –
 鈴木秀明（目白大学）・木下謙朗（龍谷大学）
- 9 自動車整備士国家試験の漢字調査ー「簡単な漢字」＝「簡単な語彙」なのか？ー
 日暮康晴（長崎大学）
- ポスター発表（2） 15:15～16:10 アセンブリー・ホール （進行：藤原京佳_大阪大学）
- 10 栄養学概論教科書の漢字・語彙調査
 多田苗美（昭和女子大学）
- 11 非漢字圏学習者は漢字学習をどう捉えているかーPAC 分析による意識構造の探求ー
 高柳真理（城西国際大学）
- 12 特定技能工業製品製造業分野2号取得要件の学科試験教材の語彙の検討
 – 有効なキャリア支援のために –
 星摩美（公立小松大学）
- 13 外国人介護福祉職の支援者向け研修が促したものの一点から線・面への思考変容ー
 木下謙朗（龍谷大学）・丸山真貴子（目白大学）
- 14 交換留学生を対象とした国際共修科目における会話活動のあり方
 – テーマ提示型活動と場面設定型活動の実践から –
 正宗鈴香（大東文化大学）
- 15 漢語サ変動詞の辞書記述に接辞サセルで他動詞になる旨を加筆する提案
 – 日本留学試験（EJU）の読解問題コーパス（林 2022）の語彙を使用して –
 金谷 由美子（大阪大学非常勤講師）

- 16 「高専留学生の実験レポートの書き方」教材の練習問題に対する留学生の AI 使用状況とその考察
山田朱美（津山工業高等専門学校）・立間淳司（津山工業高等専門学校）
加藤学（津山工業高等専門学校）

- 17 芸術専攻の大学生に必要な日本語力とは何か
－「作品をデザインし、制作する」分野の専門教員へのインタビューから考える－
込宮 麻紀子（文化学園大学）

- 18 外国人留学生のための日本語教材としての新聞記事の可能性
諸賀沙織（福岡女学院大学大学院生）

- 口頭発表⑤ 16:15～16:45 セミナー室 1 (⑤⑥司会：湯浅千映子_大阪観光大学)
美術系の大学院生は書く場面にどのような語彙を使用しているか
－グラフィックデザイン専攻の修了論文作品集を対象に－
徐心妍（一橋大学大学院生）

- 口頭発表⑥ 16:50～17:20 セミナー室 1
ベトナムにおける「法学日本語教育」を支える日本語教師養成のあり方
加藤淳（名古屋大学）

- 口頭発表⑦ 16:15～16:45 講堂 (⑦⑧司会：堀一成_大阪大学)
学術的引用発達モデル（ACDM）の提案
－初学者から研究者レベルまでを対象とした体系的診断を目指して－
中村かおり（拓殖大学）・向井留実子（愛媛大学）・近藤裕子（山梨学院大学）

- 口頭発表⑧ 16:50～17:20 講堂
辞書としての生成 AI の可能性と限界
－学習者の検索未達成事例にたいする ChatGPT-5 の回答の分析－
吉甜（国立国語研究所）・李琦（国立国語研究所）・石黒圭（国立国語研究所）

- 閉会の挨拶および次期開催校紹介 17:30～17:35 講堂
生天目知美 代表幹事（東京海洋大学）

- 学会事務局連絡 17:35～17:40 講堂

Ⅶ. CIEE 研究協議会シリーズ ― 多文化交流の最前線

(1) 国立大学法人留学生指導研究協議会

日時：2026 年 2 月 5 日(木)

場所：ハイブリッド形式（銀杏会館・ZOOM）

標記協議会は国立大学法人に所属する留学生指導担当教職員を対象に毎年開催されている。今年度の本協議会は主題「DX（デジタル・トランスフォーメーション）時代の留学生相談と指導」で、対面およびZOOMによるハイブリッド形式で開催された。まず、文部科学省高等教育局参事官（国際担当）付 留学生交流室より「留学生交流に係る最新状況と令和8年度関連予算案について」の説明があった。その後 4 つの分科会、「A. DX時代の留学生支援（手続き・相談・カウンセリング）」「DX時代の留学生教育（授業・学修支援）」「DX時代の留学生交流（イベント・地域連携）」「D. オンライン分科会」に分かれてディスカッションを実施した。分科会での討議及び全体討論を通して、留学生への多様な支援について協議が行われた。（出席者：100名、学内：8名・学外：92名、対面：41名・オンライン：59名）

2025年度国立大学法人留学生指導研究協議会
兼 第59回大阪大学留学生教育・支援協議会

主 題：「DX（デジタル・トランスフォーメーション）時代の留学生相談と指導」

日 時：2026年2月5日（木）13：30～17：00

場 所：大阪大学吹田キャンパス銀杏会館3階ホール（対面）・オンライン併用

主 催：大阪大学国際機構国際教育交流センター

協 力：COISAN（国立大学留学生指導研究協議会）

次 第：（敬称略）

〔総合司会 大阪大学国際機構 有川友子〕

挨 拶（13:30-13:40） 大阪大学グローバル教育担当理事・副学長 宮本陽一

I. 留学生受入れに関する施策
（対面&オンライン参加可能）

1, 説 明（13:40-14:10）

「留学生交流に係る最新状況と令和8年度関連予算案について」

文部科学省高等教育局参事官（国際担当）付 留学生交流室 参事官補佐 宮川卓也

2, 質疑応答（14:10-14:20）

〔II. & III. コーディネーター： 東北大学グローバルラーニングセンター 准教授 渡部留美

II. 講 演（14:30-15:00）

「留学生教育における DX の活用」

宮崎大学国際連携機構国際連携センター 准教授 伊藤健一

III. 分科会「DX（デジタル・トランスフォーメーション）時代の留学生相談と指導」（15:05-16:25）

A：「DX 時代の留学生支援（手続き・相談・カウンセリング）」

ファシリテーター：東京学芸大学 教職大学院 准教授 米本和弘
山梨大学 教育統括機構国際化推進センター 教授 伊藤孝恵

B：「DX 時代の留学生教育（授業・学修支援）」

ファシリテーター：茨城大学 グローバルエンゲージメントセンター 准教授 瀬尾匡輝
信州大学 グローバル化推進センター 准教授 仙石 祐

C：「DX 時代の留学生交流（イベント・地域連携）」

ファシリテーター：大阪大学 国際教育交流センター 准教授 岡本紗知
京都大学 学生総合支援機構 学生相談部門 講師 梁瀬まや

D: オンライン分科会

ファシリテーター：宮崎大学 国際連携機構国際連携センター 准教授 伊藤健一
金沢大学 理工研究域 准教授 岸田由美

III. 各分科会からの報告と全体討論（16:30-16:50）

閉会の挨拶（16:50-17:00） 大阪大学国際機構長 有川友子

*情報交換会：17：30～19：00 銀杏会館2階ミネルバ

以上

(2) 第 18 回大阪大学専門日本語教育研究協議会

2026 年 2 月 17 日、大阪大学吹田キャンパスのコンベンションセンターにおいて、「日本語による書記言語コミュニケーションとその教育・学習支援の展望—学習者作文研究の成果共有から教育開発の新たな可能性を探る—」と題し、講演者として、東京外国語大学の伊集院郁子先生および筑波大学の岩崎拓先生を招へいして開催された。プログラムとポスターは次の通りである。参加者は合計で 61 名（学内 27 名・学外 34 名）であり、活発な議論が展開された。

日本語による書記言語コミュニケーションと その教育・学習支援の展望

— 学習者作文研究の成果共有から教育開発の新たな可能性を探る —

講演 1 :

作文研究から評価研究、そして教育・学習支援へ

伊集院 郁子

東京外国語大学大学院国際日本学研究院 教授

講演 2 :

日本語の書記言語コミュニケーションの実態と展望： 母語話者と学習者の句読点・括弧使用の共通性と差異から考える

岩崎 拓也

筑波大学人文社会系 助教

全 体 討 論

司会：中俣 尚己

国際機構国際教育交流センター 准教授



←お申し込みは
こちらから
(2/13ㄨ切)

大阪大学国際機構国際教育交流センター

CIEE Center for
International
Education and
Exchange
<https://ciee.osaka-u.ac.jp/>

日時:2026年2月17日(火)

13時20分～16時45分

(受付 13時00分～)

場所:大阪大学吹田キャンパス
コンベンションセンター会議室1

日本語による書記言語コミュニケーションとその教育・学習支援の展望
ー学習者作文研究の成果共有から教育開発の新たな可能性を探るー

日時：2026 年 2 月 17 日（火）13：20～16：45（受付 13:00）

場所：大阪大学吹田キャンパス コンベンションセンター会議室 1

主催：大阪大学国際機構国際教育交流センター

---- プログラム ----

総合司会 国際機構国際教育交流センター 特任講師 藤原 京佳

13：20～13：25 開会の挨拶 国際機構長 教授 有川 友子

13：25～13：30 趣旨説明 国際機構国際教育交流センター 教授 村岡 貴子

13：30～14：30

講演 1 作文研究から評価研究、そして教育・学習支援へ

東京外国語大学大学院国際日本学研究院 教授 伊集院 郁子

14：30～15：30

講演 2 日本語の書記言語コミュニケーションの実態と展望：

母語話者と学習者の句読点・括弧使用の共通性と差異から考える

筑波大学人文社会系 助教 岩崎 拓也

15：30～15：50 休憩

15：50～16：40 全体討論 司会 国際機構国際教育交流センター 准教授 中俣 尚己

東京外国語大学大学院国際日本学研究院 教授 伊集院 郁子

筑波大学人文社会系 助教 岩崎 拓也

16：40～16：45 閉会の挨拶 国際機構国際教育交流センター長 教授 義永 美央子

日本語による書記言語コミュニケーションとその教育・学習支援の展望

ー学習者作文研究の成果共有から教育開発の新たな可能性を探るー

趣旨説明

現在、私たちは、多種多様なメディアを活用し、時空間を超えて多くの未知の人たちも含めたコミュニケーションや交流が、迅速に、かつ容易となった世界に生きています。このことは、古くから続いていた対面でのコミュニケーション以外に、多くのソーシャルメディアを活用したもの、AI に支援を得て他者で行うもの、さらには、AI そのものと自身とで行うものまで、他者との関係性やメディア・リソースの活用方法が実に多様になっていることを示します。そのような多様なコミュニケーションにおいては、すでに久しく「打ち言葉」を中心とした文字を媒体とする書記言語コミュニケーションの場面が増え、そのあり方も、世代やコミュニケーションの関与者、その現場の状況によって著しく異なるケースがあるようにも観察されます。

上記のように、現代社会で変貌を続ける書記言語コミュニケーションの状況は、言語教育の現場や関連研究の内容・方法にも少なからず影響を及ぼしています。言語教育の現場で扱う内容、その教育・学習支援の方法、および学習者・教員・支援者の言語教育に対するビリーフも、それぞれ、目まぐるしい変化への対応を迫られていることでしょう。また、実際に、書記言語コミュニケーションに関する研究方法も、多様なツール・リソースを活用して行われており、そこに関わる研究者のビリーフも、定量的手法・定性的手法を問わず、一層多様化しているものと推測されます。

本協議会では、上記のような現状認識を背景とし、書記言語コミュニケーションを大きなテーマとします。具体的には、学習者作文の研究と教育実践を蓄積されてきた講演者 2 名をお招きして、これまでのご経験や研究成果、教育への還元についてお話しいただきます。基本的に日本語教育学や日本語学の枠組みにはなりますが、日本語非母語話者の作文研究は、従来から、日本語母語話者の作成した文章への研究や、日本語の文章自体の研究に対しても示唆的であり、興味深い話題や知見を提供しています。今後の大いなるポテンシャルが感じられるライティング教育の研究領域であると言えます。

本協議会は、協議会名称に「専門」という表現を使用していますが、特定目的のための日本語教育、すなわち専門日本語教育を語ることは、専門分野や職場の違いを超え、多様な背景の人と人との関係性や協働、コミュニケーションにも言及することになります。多くの変化が求められる現代、その変化を捉え、言語教育・学習支援のあり方を再考して教育・支援の場に還元していくことを目指し、広く関連の議論を展開したいと思います。分野を問わず、関心をお持ちの方々に多数お越しいただき、積極的に議論へのご参加をいただきたいと思います。

VIII. 理学研究科特別日本語プログラムの実施

1. 背景

国際化が進む大阪大学において各部局で独自に受け入れている留学生はますます増加しており、そのような留学生に対する日本語習得の支援が課題となっている。

すでに国際教育交流センターでは吹田・豊中の各キャンパスで日本語授業を実施している。しかし、それらの授業は短期プログラム学生や研究生など、メインターゲットが設定されているために、そこに当てはまらない学生にとって必ずしも最適化されたプログラムとは言えない。たとえば、日本語の単位を必要としない大学院生が、単位が出る1限の授業に週3回出席しなければならないという状況が起こっている。

2. 「部局特化型日本語プログラム」とは

2025年度より国際機構の新たな取り組みとして、「部局特化型日本語プログラム」の取り組みを開始した。このプログラムでは、国際機構は各部局の状況、ニーズに応じて日本語学習プログラムを企画し、教員の紹介、学習コンテンツの準備、事前事後アンケートの作成と実施を行い、部局からコーディネート料手数料を徴収する。学生の募集、広報、教室の手配、教員の雇用は各部局で行う。

2025年度は理学研究科において春夏学期と秋冬学期の計2回、「理学研究科特別日本語プログラム」を実施した。

3. 実施の要領

	春夏学期	秋冬学期
実施回数	12回	12回
開始日時～終了日時	2025年5月14日～2025年7月30日	2025年11月5日～2026年1月28日
日時・場所	水曜日昼休み・理学研究科講義室	水曜日昼休み・理学研究科講義室
レベル・使用教材	200レベル／『いろどり』2を使用	100レベル／『NEJ』を使用
申込者数	15名	25名
初回参加者	12名	8名
最終発表参加者数	8名	5名

4. 具体的な内容

理学研究科のニーズを聞いたところ、水曜日の昼休みが実験などで忙しい院生たちも問題なく参加できるということがわかった。移動時間確保のため、毎回の最初と最後はフリーな会話セッションとし、コアの1時間で授業内容を実施した。また、文字の練習は授業内では行わなかった。シャドーイングとエッセイの宿題を交互に課し、最終週である第12回は、一般の方をゲストとして招き、スピーチ発表を行った。秋冬学期は職員のみであったが、春夏学期は日本人学生や先輩の留学生も参加し、教室外の日本語話者との質疑応答が行われ、盛り上がった。

申込者の中にはN3、N2を所持しているレベルの高い学生もいたため、あらかじめこちらから断っている。12回の中での離脱者は3,4名であった。



写真 1. 春夏学期の発表会の様子

5. 評価

最終発表参加者にまず、「日本語は伸びたか？」という質問に 5 段階で評価してもらったところ、春夏学期は平均 4.5、秋冬学期は平均 4.8 という高い数値であった。項目別では以下の通りである。

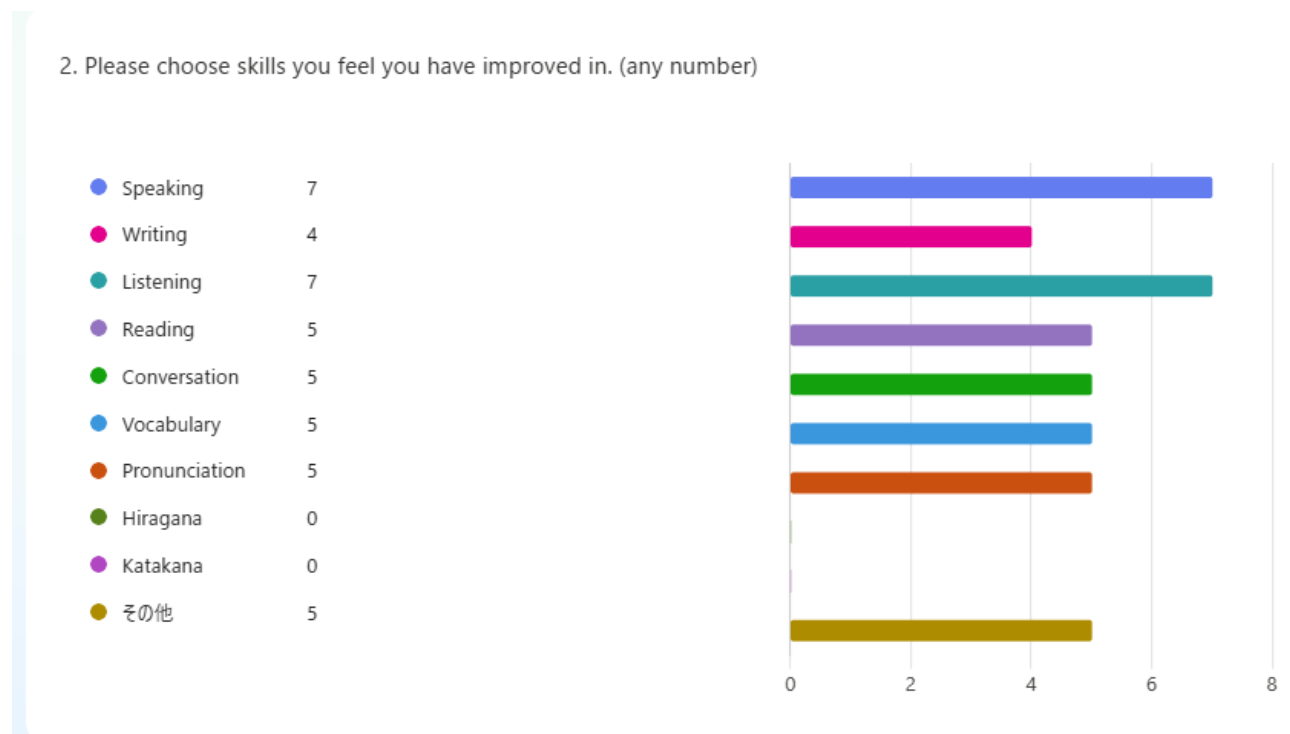


図 1. 春夏学期の回答結果

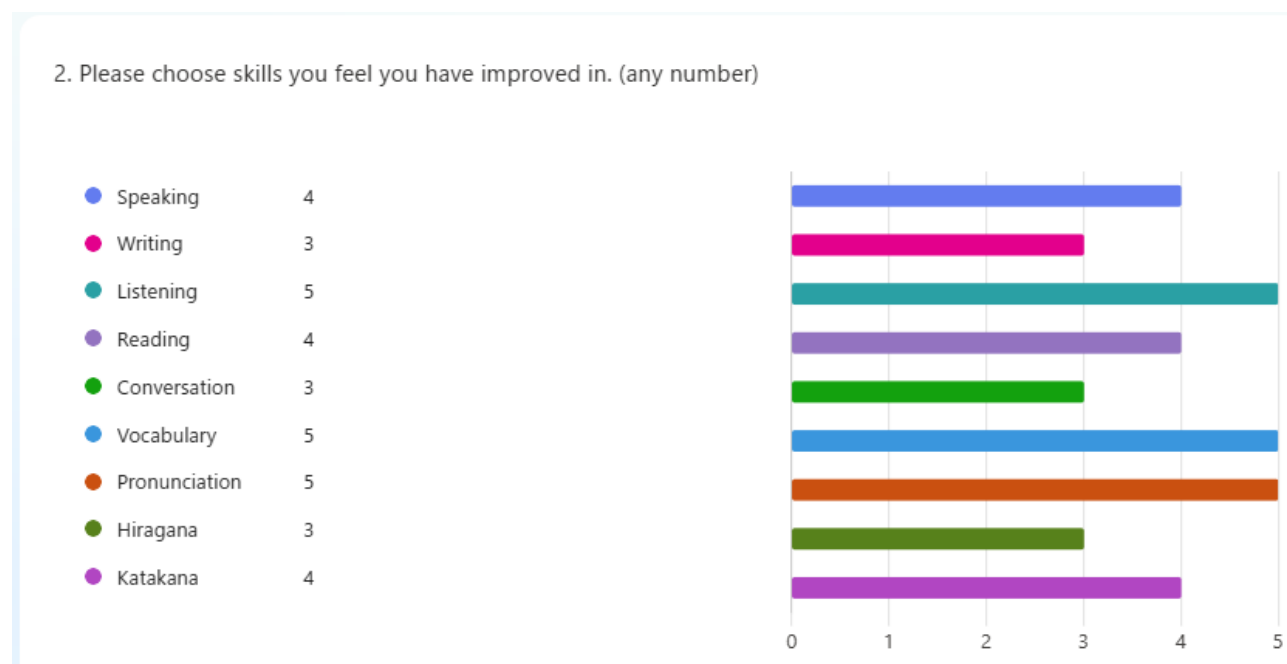


図 2. 秋冬学期の回答結果

自由回答欄からも”I am very happy I took the class. I am much more confident in my Japanese now than I was before.“、”The sensei was very interactive with the students and made sure that everyone got the lesson. He was very helpful when there were things that were difficult to understand. The class was very enjoyable.”など、全体として非常に満足度が高かったようである。

もっと学びたい、今後も開講して欲しいとの声も多数あり、2026 年度も同様の形態で継続することとした。

IX. 2025 年度夏休み・春休み日本語特別演習の実施

国際教育交流センター日本語教育部門は、夏季休暇・春季休暇中に日本語特別演習を実施した。本演習は、学期期間外においても日本語学習の場を提供し、学習者の日本語運用能力を維持・向上させることを目的とするものである。また、正規の授業を履修することができない研究員等への日本語学習提供の場にもなっている。今年度は、以下の日程でそれぞれ実施した。

<実施日>

夏休み：2025 年 9 月 1 日、2 日、3 日、4 日、5 日（計 5 回）

春休み：2026 年 2 月 9 日、10 日、12 日、13 日（計 4 回）

<参加人数>

夏休み：初級 5 人、中級 8 人

春休み：初級 4 人、中級 5 人

両クラスにおいて、日常会話を練習できるような授業計画を立てたほか、受講者との交流をより深めたいといった声を反映させ、授業中に積極的に日本語を用いたゲームを実施した。自己紹介をした次の授業では、他己紹介を行ってもらったりしながら、受講者どうしの仲が深まるような授業になるよう努めた。

テキストは、『いろいろ 生活の日本語』（国際交流基金）を適宜使用し、実際の日常生活での場面を想定しながら、会話練習を行った。また、受講者から寄せられた日本語や日本の文化に関する質問について一緒に考えることもあった。

受講者が日常生活の中でどのくらい日本語を使用するかについては、かれらが所属する研究室などの状況によっても大きく異なる。ただ、共通するのは、日本語を使ってやり取りがしたいという点である。受講者の中には、自身の日本語が他の人にちゃんと伝わっているのだろうか、日本語は間違っていないだろうか等といった不安もあるようだが、それでも日本語で話したいという想いがある。そのような想いが演習時にも現れていたように思う。



写真１・２ 授業の様子（夏休み）

演習終了後に実施したアンケートでは、受講者が本演習に満足していることが確認でき、次回以降もこのような演習に参加したいとの回答を得た。また、本演習の一番の魅力として、コミュニケーションの良い練習の場になったことが挙げられていた。一方で、授業の日数がやや少なかったといった声や、上級レベルを設ければより良いなどといった声も聞かれた。この点は、中級に参加した人の中に上級レベルの学生が参加していたことが背景としてあり、今後の課題として検討していきたい。

今後もこれらの声を踏まえながら、より多くの人々に日本語練習の場を提供していきたいと思う。



写真３・４ 授業の様子（春休み）

X. 国立大学フェスタ OU マルチリンガルプラザ体験

2025 年 11 月 2 日（日）および 3 日（月）に、国立大学フェスタの一環として「OU マルチリンガルプラザ体験」が、大阪大学マルチリンガル教育センター、国際機構国際教育交流センターの共催により実施された。「OU マルチリンガルプラザ体験」は、普段は学内構成員を対象に課外の言語学習支援を行っている施設の活動を市民講座として学外に公開したものである。

期間中に「日本語学習支援ワークショップ」、「世界の鉄道に乗ってみよう」、「会話練習体験」の 3 つのイベントがオンライン（Zoom）で実施され、「日本語学習支援ワークショップ」を国際教育交流センター教員が担当した。本ワークショップは、地域の日本語教室等で活動し、日本語学習支援に関心を持つ人を対象としたもので、府内のみならず府外からの参加もあった。参加者は、豊中市・池田市・大阪市・東広島市からの 5 名の参加であった。

当日は、施設の活動紹介の後、在住外国人を対象とした日本語教育、「やさしい日本語」が必要とされる背景と方法、多文化共生に向けた傾聴、多様な言語的背景を持つ人々とのコミュニケーション、AI 翻訳について話題提供を行った。その後、日本語学習支援への理解を深めることを目的として、参加者同士の交流の時間を設けた。

交流の時間には、ボランティアの担い手が減少し、地域の日本語教室において活動メンバーの高齢化が進んでいること、学習者・支援者ともに多忙であり定期的な参加が難しくなっていること、また、学習者によっては「やさしい日本語」の使用に抵抗を示す場合があるため配慮が求められることなどが共有された。

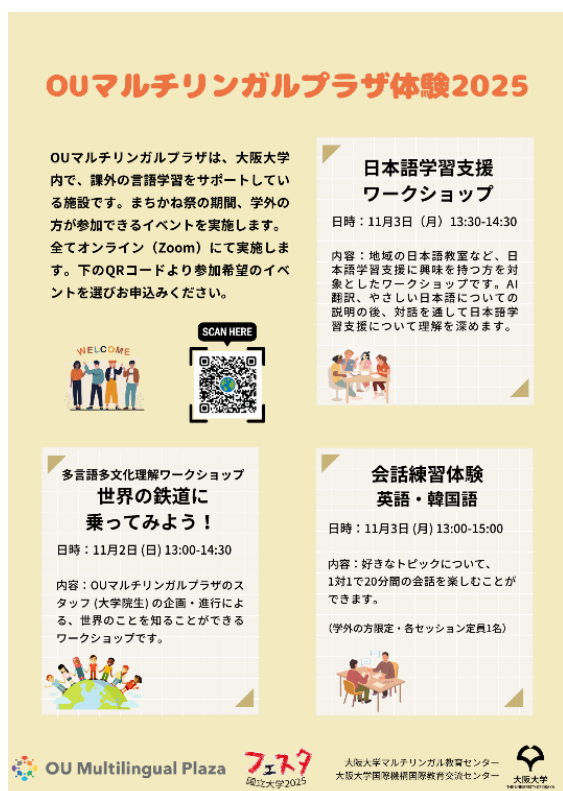


図 1. ワークショップのポスター

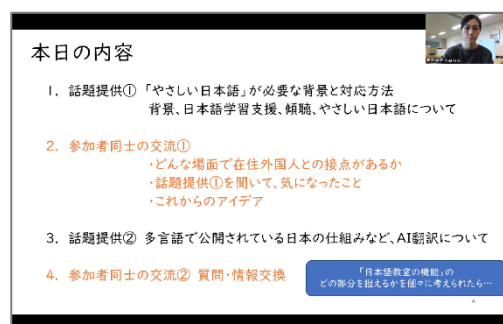


写真 1. 当日のスライドの一部



写真 2. OU マルチリンガルプラザ

XI. 高度外国人材に向けたキャリア支援イベントの実施

2025 年度に実施した、高度外国人材に向けたキャリア支援イベントについて紹介する。これらの取組は、専門性の高い高度外国人材である大学院留学生を主な対象としたイベントであり、留学生が日本における就職やキャリア形成に対する理解を深め、自らのキャリアを具体化することを目的として企画、実施されたものである。

1. 博士留学生対象 企業訪問会【塩野義製薬株式会社】

2025 年 9 月 16 日、大阪大学、奈良先端科学技術大学院大学、沖縄科学技術大学院大学、京都工芸繊維大学、滋賀医科大学が共同となり、博士留学生向けに、塩野義製薬株式会社医薬研究センター（SPRC）への企業訪問を実施した。

博士留学生は、高度な専門性や研究実績を有する一方、日本語能力の不足などから企業からの採用情報が十分に届きにくく、就職活動に困難を感じるケースが多く見られる。さらに、新卒一括採用を一般的とする日本の就職活動が、博士留学生の就職活動のスケジュールに適合しにくいいため、企業との接点が確保されにくいといった課題も散見される。こうした背景を踏まえ、本企画は博士留学生が、日本企業の研究開発現場への理解を深めるとともに、国内企業への就職の関心と意欲を高めることを目的として実施された。

本学の博士留学生たちは、研究開発職といった専門性を活かした職を志望していることが多く、本企画には、主に薬学、医学を専攻する学生からの応募があり、学内選考を経た本学の博士課程に在籍する留学生 5 名がこの企画に参加した。

当日は、上記大学に所属する約 30 名の博士留学生が参加し、英語による塩野義製薬社員による業務説明や研究所見学が行われ、参加者たちは医薬品開発の現場や研究体制についての理解を深めた。また、各大学の代表者が、所属大学の紹介を行うとともに、日本人社員や留学生社員との交流を行った。参加者からは、「日本企業の研究現場の雰囲気を直接感じる事ができた。」「企業を訪問し、研究職として働く方々の話を聞ける機会は大変貴重で、有意義だった。」といった声が聞かれ、本企画が、自身のキャリア形成を考えるうえで有益な経験になったことが確認された。

2. 2025 年度 大学院留学生対象 英語合同企業説明会

2025 年 12 月 16 日、日本企業への就職を希望する大学院留学生を対象として、英語による企業説明および企業担当者との交流を行う合同企業説明会が、大阪大学、奈良先端科学技術大学院大学、北海道大学、横浜国立大学、京都工芸繊維大学、広島大学との共同主催により開催された。

当日は、富士通株式会社、パナソニックホールディングス株式会社、ロート製薬株式会社等、計 18 社が参加し、各企業の英語による会社説明や事業紹介が行われた。また、参加学生は企業担当者へ直接質問を行うなどして、有意義な相互理解の場となった。言語面の壁を軽減するため、英語による日本企業との接点の機会が提供された本企業説明会は、日本語での就職活動に不安を抱えている大学院留学生にとって、貴重な日本企業との交流の機会となった。

本企業説明会は、オンライン開催の利点を活かし、地域や所属大学を越えた計 227 名が参加し、大阪大学からは 35 名の学生が参加した。参加学生にとっては、多様な業界や企業への理解を深めるとともに、日本における自身のキャリア形成について具体的に考える機会となっただけでなく、参加企業にとっては、高度外国人材の活躍促進に向けた方針や取組を発信する機会となり、双方にとって有意義な企画となった。

Open exclusively to master's and doctoral students from the six universities

Postgrad Job Fair

Job fair **exclusively** for postgrad international students *in English*
Get to meet and interact with global companies who are interested in hiring students in **STEM fields**

ZOOM 2025 12.16 Tue.
1:00-5:00 P.M.
12:45 - P.M. OPEN

<https://www.waseda.ac.jp/postgrad/jobfair/2025>
*Upon applying for this event, you will also be registered at WA.SA.Bi.

Breakout sessions Casual attire Open to students of all grade levels*

Participating Companies:

JR FUJITSU GLW HORIBA
アイフォーコム ISK 川本工業株式会社
構造計画研究所 ホールディングス KOZO KEIKAKU ENGINEERING HOLDINGS Inc. Money Forward
日通ProSOL NTT Panasonic Group Rakuten Mobile
Ridge-i ROHTO SMOH SATAKE SHIONOGI

*In alphabetical order
*Information on the participating companies will be added from time to time

For enquiries: Please contact the career center of your university
For inquiries about this event: please feel free to contact WA.SA.Bi. Email: go-en@morikosan.co.jp Person-in-charge: Pearlyn (English OK)

3. SPI（就職筆記試験）対策講座

2026年2月7日、日本企業への就職を目指す留学生を対象として、就職活動に必要な筆記試験の一つであるSPI対策講座をオンラインで実施した。本講座は、留学生から以前より要望の多かったテーマであり、日本特有の就職筆記試験への理解を深め、就職活動における不安軽減を目的として開催された。

講義は「やさしい日本語」を用いて実施され、また、スライドにはふりがなや英訳を併記することで、日本語能力試験N3レベル程度の学生でも参加しやすい内容とした。これにより、日本語能力に不安を抱える留学生に対しても、学習機会を提供する講座となった。その結果、本講座には92名の申込みがあり、当日は56名が参加した。

当日は、日本企業の採用活動で用いられるSPI以外の各種筆記試験についても紹介され、業界ごとの試験活用傾向や特徴について解説が行われた。また、留学生が特に苦勞しやすいポイントや、各分野における解答の考え方や実践的なテクニックが提示されたことで、参加学生の理解促進につながった。

終了後のアンケートでは、5段階評価で平均4.8という高い評価が得られ、本テーマが日本企業への就職を目指す留学生に対する実践的なキャリア支援として、高いニーズと満足度を持つことが確認された。

大阪大学 留学生対象

SPI(就職筆記試験)

実践講座

各種筆記試験概要と対策を学び、
自立学習に向けた勉強計画が立てられるようになる120分！

日付 2026年 2月7日(土)

時間 午前 10:00 ~ 12:00

形式 場所：オンライン(ZOOM)
言語：日本語

無料

講座内容

日本の就職に必要な筆記試験の一つ、SPIの概要や対策を説明します。
留学生が苦勞するポイントを知ることで、各分野の回答テクニックを身につけることができます。
また、自分で学習するためのスケジュール設計のポイントもお伝えします。
講義はやさしい日本語でおこない、重要な用語やポイントは英語でも説明するので、**N3レベルの学生から**参加できます。

担当講師

中山先生 キャリアコンサルタント
旭光キャリアパートナーズ所属

人材業界で約20年間、法人・行政営業や
人材教育に従事。その後、学生や海外留人の
就職やキャリア支援の場幅広く活動中。
《旭光キャリアパートナーズ》では、WEB
テスト対策や面接・G・D対策、自己分析など、
年間200人以上の留学生を支援。特にSPI対策
では、毎年受講者から高い評価を受けている。



申し込み



<https://x.gd/nm1YW>

主催：大阪大学国際機構 国際教育交流センター (CIEE)
お問い合わせ：career@ciece.osaka-u.ac.jp